

二月

腹中常鳴、氣上衝胸。喘不能久立、邪在大腸、刺肓之原、巨虛上廉三里。小腹控睾、引腰脊上衝心、邪在小腸者。連睾系屬于脊、貫肝肺、絡心系。氣盛則厥逆、上衝腸胃燻肝、散于肓、結于臍。故取之肓原以散之、刺太陰以予之、取厥陰以下之、取巨虛下廉以去之、按其所過之經以調之。善嘔、嘔有苦、長太息、心中憺憺、恐人將捕之、邪在膽。逆在胃、膽液泄、則口苦。胃氣逆則嘔苦、故曰嘔膽、取三里以下。胃氣逆、則刺少陽血絡、以閉膽逆、卻調其虛實、以去其邪。

飲食不下、膈塞不通、邪在胃院。在上院則刺抑而下之、在下院則散而去之。小腹痛腫、不得小便、邪在三焦約。取之太陽大絡。視其絡脈、與厥陰小絡。結而血者、腫上及胃院、取三里。覩其色、察其以(太素 目)、知其散復者。視其目色、以知病之存亡也。一其形、聽其動靜者、持氣口人迎、以視其脈。堅且盛且滑者病日進、脈軟者病將下。諸經實者、病三日已。氣口候陰、人迎候陽也。

〈大腸病〉

腹中、常に鳴るは、氣、上りて胸を衝くなり。喘ぎて久しく立つ能はざ

るは、邪、大腸に在り、肓の原※、巨虛上廉の三里を刺す。

※肓の原 九鍼十二原「肓之原、出於膀胱(へそ)、即任脈之下氣海也」

太素 育作責。「責、膈也。膈之原、出鳩尾也」

甲乙 「腸中常鳴時、上衝心、灸臍中。腹脹腸鳴、氣上衝胸、不能久立、天樞主之。
大腸有熱、腸鳴腹滿、俠臍痛、食不化、喘不能久立、巨虛上廉主之」
邪氣藏府病形 「大腸病者、腸中切痛而鳴濯濯」「當臍而痛、不能久立、與胃同候、取
巨虛上廉」

〈小腸病〉

小腹、睪を控き、腰脊を引きて、上つて心を衝くは、邪、小腸に在ればなり。睪に連なり脊に系屬し、肝肺を貫き、心系を絡ふなり。氣、盛んなれば、則ち厥逆して、上のかた腸胃を衝き、肝を燻し、肓に散り、臍に結ぼる。

故に之を肓の原に取り、以て散らす。太陰を刺して之に予(あづか)ニ治療とし)り※、厥陰を取りて之を下す。巨虚下廉を取りて之を去り、其の過ぐる所の經を按じて之を調ふなり。

邪氣藏府病形 「小腸病、小腹痛、腰脊控睾而痛」

※張介賓「刺太陰以予(ニ與)之、補肺經之虛也。取厥陰以下之、寫肝經之實也」

張氏は「予」を「与える」の意に取つてゐる。

〈胆病〉

善々嘔き、嘔きて苦み有り、長く太息し、心中、憺憺(タン、うれふ)として、人の將に之を捕へんとすと恐るる者は、邪、膽に在り。逆、胃に在りて、膽液、泄れば、則ち口、苦し。胃氣、逆せば、則ち苦みを嘔ぐ。故に嘔膽と曰ひ、三里を取りて下す。胃氣、逆すれば、則ち少陽の血絡を刺し、以て膽逆を閉ず。卻(ま 同じ行為が繰り返されることを表す)た、其の虚實を調へ、以て其の邪を去る。

邪氣藏府病形「膽病者、善太息、口苦、嘔宿汁、心下澹澹、恐(十如 太素・甲乙・千金・脈經)人將捕之、嗌中吟吟然、數唾」

〈胃脘病〉

飲食、下らず、膈塞して通じざるは、邪、胃脘に在り。上脘※に在れば、則ち刺して抑へて下す。下脘に在れば、則ち散らして去る。

※楊上善「邪在上管、刺胃之上口之穴、抑而下之。邪在下管、刺胃之下口之散穴而去之也」腕 \parallel 管

邪氣藏府病形「胃病者、腹脹脹、胃脘當心而痛、上肢兩脅、隔咽不通、食飲不下、取之三里也」

〈三焦病〉

小腹、痛みて腫れ、小便を得ざるは、邪、三焦の約(からまり ←不都合、やまい)に在り。太陽大絡に取る。

邪氣藏府病形「三焦病者、腹氣滿、小腹尤堅、不得小便、窘急、溢則水留即爲脹、候在足太陽之外大絡、大絡在太陽少陽之間、亦見于脈、取委陽。膀胱病者、小腹偏腫而痛、以手按之、即欲小便而不得」

張志聰「此邪在膀胱而爲病也。三焦下俞、出於委陽、並太陽之正、入絡膀胱約下焦。實則閉癃、虛則遺溺、小腹腫痛、不得小便、邪在三焦約也」

其の絡脈と、厥陰の小絡を視、結ばれて血あり、腫れ上りて胃脘に及ぶは、三里を取る。

〈診察法〉

其の色を観、其の以(太素 目)を察すれば、其の散復を知る。其の目の色を観て、以て病の存亡を知る也。其の形を一にし、其の動静を聽く者は、氣口、人迎を持し、以て其の脈を視るべし※。堅にして且つ盛、且つ滑なるは、病、日々に進む。脈、軟なるは、病、將に下らんとす。

※九鍼十二原「觀其色、察其目、知其散復。一其形、聽其動靜、知其邪正。」

小鍼解「觀其色、察其目、知其散復、一其形〔※〕、聽其動靜者、言上工知相五色、于目有知、調尺寸小大緩急滑濶、以言所病也」

馬蒔 「一其形之肥瘦。曰一者、肥瘦各相等否。聽其身之動靜、凡身體病證語默皆是」
「一は、其の形の肥瘦なり。一にすと曰ふは、肥瘦は、各々相ひ等しく否なり。其の身の動靜を聽く(ゆるす)とは、凡そ身體の病證の語默(語ることと黙して語られないこと)、皆な是(これ)なり」

第一とすべきは、患者の身体の肥瘦である。それを第一にするのは、肥つているのも瘦せているのも、各々等しく良くないからである。患者の身体の動靜を聽(ゆる)すとは、凡そ身体の病證の語ることと語られないこと、これら全てのことである。

・素問・鍼解篇では他をさし置いて見事な注を付して いた馬元台が、ここではハズし た注を付けている。こういうのを読むと面白い。

森素・鍼解案文「案、五色修明、謂目明。音聲能彰、謂耳聰也。修明、蓋謂目能修收五色之明。能彰謂耳能聽別音聲之彰也」

五色修明というの は、目が明らかなこと で、音聲能彰とい うの は、耳が聰(さと)いこ とだ。修明とい うの は、蓋し目がよく五色(すなわち五藏の状態を表す色)が見分けら れる明らかなこと で、能彰とい うの は、耳がよく五藏の状態を表す音聲を聽き別け られる彰らかさのことである。

諸經、實なる者は、病、三日にして已ゆ。氣口の候、陰なりて、人迎の候は陽なり。

楊上善「氣口、藏脈、故候陰也。人迎、府脈、故候陽也」

張介賓「氣口在手太陰肺脈也。氣口獨爲五藏主、故以候陰、人迎在頭陽明胃脈也。胃爲六府之大源、故以候陽」

壬子(嘉永5、1852、抽齋48歳)初冬廿八日以周日日校本一校了

〈大腸病〉

腹中が常に鳴るのは、気が上つて胸を衝いているのです。喘いで長く立つていられない者は、邪が大腸にあります。これは関元と、巨虚上廉の三里穴を刺します。

〈胆病〉

しばしば嘔(えづ)き、嘔くと苦味が口に上つてきて、長くため息を吐き、心中が鬱々として、人が自分を捕えに来るような恐れを抱いている者は、

邪が膽にあるのです。逆気が胃にあつて、膽液が泄れるので、口に苦味を感じるのです。胃気が逆したときには、苦味を嘔くようになります。これを嘔膽と言い、三里を刺して逆氣を下します。胃気が逆した時は、少陽の血絡を刺して、膽逆を閉します。同時に（卻 同じ行為が繰り返されることを表す）、その虚實を調べて、その邪氣を去るようになります。

〈胃脘病〉

飲食が下らず、横隔膜のあたりが塞つて通じないのは、邪気が胃脘にあります。胃の上方にあれば、鍼をして抑えて下します。下方にある場合は、散らして去ります。

〈三焦病〉

下腹が痛んで腫れ、小便が通じなくなつた場合は、三焦の絡まりが邪を生じているのです。太陽經に血絡の大きなものを求めて寫血します。太陽經の絡脈と、厥陰經の小絡を見て、結ぼれて血が溜まり、腫れ上つて胃に及んでいる場合は、三里に鍼をします。

〈診察法〉

その顔色を見、その目を診察すれば、病の予後が分ります。患者の目の色を観て、病の帰趨を知るのです。

術者は身体に神經を行き渡らせ、患者の脈の動静を知ろうとする場合、気口と人迎に指先をしつかりと保持し、脈を診るべきである。脈が堅実で盛んであり、滑らかなのは、病が日増しに進んでいます。脈が軟らか

である場合は、病がこれから癒えようとしています。

諸經脈が実している場合は、病は三日経てば癒えます。

その場合、気口

脈を陰と見、人迎脈を陽と見ます。